

デジタルカメラはなんといっても「フィルム不要」という所が便利です。デジタルカメラをはじめて手にした人でも、撮影した写真はすぐに確認でき、パソコンに保存することで自宅でプリントアウトすることもできます。メモリーカードに記録されたデータは消去することもできるので、ムダを心配せず、臆さず写真が取れる所も利点です。街角で見かけた面白い風景や看板を写したり、バスや電車の時刻表などを撮影すると、メモ代わりにもなります。また、パソコンとの連携が可能です。せっかくデジタルカメラの画像をパソコンに取り込んだのであれば、鑑賞するだけでは面白くありません。メールに添付したりブログにアップしたり。また、旅先の報告を現地からリアルタイムで送ることもできます。さらに、画像はソフトを使って自由に加工することもできます。もちろん、プリンターがあれば年賀状や暑中見舞いにも個性溢れる写真を入れて友達をびっくりさせることもできそうです。

どんなデジタルカメラがよろしいでしょうか。

簡単なのがいいんですが。子供でも使えるような。

それでしたら、この辺のはいかがですか。(二、三台取り出して見せる。)

(一つを取り上げて)これは…。

はい。シャッターボタンを押すだけでいいんです。

あ、そうですか。あの、部屋の中でも撮れますか。

はい、ここを押すと、フラッシュモードになります。液晶画面の画像のピント合わせができれば、シャッターボタンを押してください。

このボタンを押すんですね。

ええ、そうです。フラッシュは、使わないときは、元に戻しておいてください。電池がなくなりますから。ちょっとやってみていいですか。

はい、どうぞ

ええと、フラッシュモードを選んで…。

ええ。液晶画面をみてください。

ああ、ここですね。そして、ピントがあったらシャッターボタンを押す、と。

そうです。

で、フラッシュを元に戻して…。

ズームするにはこのズームボタンを押してください。ズームボタンを押すとズーム倍率が表示されます。

ああ、こうですね。バッテリーはどうやって充電するんですか。

はい。バッテリー後部をカチッと音がするまで軽く押して、充電器に入れてください。充電が終わったら充電器をコンセントから抜き、バッテリーを充電器から取り出してください。

ああ、こうですね。

ええ。そして、バッテリーメモリースティックデュオカバーを開けて、充電したバッテリーを入れてください。

はあ、そうですか。

はい。

メモリースティックデュオは別売りですか。

店ええ、そうです。で、もし何でしたら、お店に持って行かれたら、このカメラに合うメモリースティックを売ってくれますから。

ああ、そうですか。それなら安心です。

(デジカメ写真を撮る)

写真を一枚撮りましょう。

ありがとう。どの辺で撮りましょうか。

そうですね

この辺でいいですか。

そこは顔が木の影になりますから、もう少し左によってください。

このぐらいですか。

そう、結構です。はい、写しますよ。チーズ!

ありがとうございました。今度は私が写しましょう。

じゃ、お願いします。これを押すと、レンズカバーが開きます。

押すだけですね。

はい。安心して撮ってください。削除ボタンを押せばすぐ削除することができますから。

便利なデジタルカメラですね。私も一台買おうかな。

林ええ、いいカメラですよ。買うなら、この機種を勧めます。

じゃ、写しますから、笑ってください。

記念写真

わたしの父は今でも、家族や親戚の人たちに頭が上がらない。

まだフィルムカメラがはやっていた時のことだった。その日は、わたしのいとこののりちゃん（父の姉の子供）の結婚式だった。前日は台風 23 号で大雨が降ったが、その日は、雨もやみ、風は少し強かったが、とてもよい天気になった。のりちゃんの家が集まった親戚の人たちは、口々に、「よかった、よかった。」と喜び合っていた。みんな部屋を出たり入ったりして、落ち着かない様子でお嫁さんを待っていた。「来た、来た。」という声に飛び出していくと、きらきら光る赤い着物姿ののりちゃんが、すてきなかんざしを付けて、母に手を引かれながら玄関から入ってきた。父が、「待って、待って。玄関から入ってくるところを一枚。」と言いながら、パッと、フラッシュをたいた。それから、床の間の前で、「はい、こっちを向いて。はい、もう少しうれしそうに。」とかなんとか、前から写したり、横から写したり、後ろすがたを写したり、名カメラマンぶりだった。

のりちゃんは静岡へ行ってしまうので、親戚の人たちも、わたしと妹も、それぞれお嫁さんのそばへ行っ
ては父に写してもらった。母が「後で、フィルム入れてなかった、なんて言うんじゃないでしょうね。」と冷やかしたら、「絶対に大丈夫。撮影技術は保証ずみなんだから。」と言いながら、お嫁さんとお婿さんを並べては、パッ、お婿さんの親戚の人たちを並べては、パッ、額の汗をふきふき、フラッシュをたいた。ところが、結婚式の次の日、写真屋さんに頼みに行く前に、「まだ、二、三枚、フィルムが残っているから。」と、母を写したとき、二、三枚どころか、それ以上写しても残っているようなのだ。父は変だと思ったらしく、あわてて、カメラを開けてみて、大声を出した。

「ああ、一卷の終わりだ。」

どうしたわけかフィルムは全然動かず、空回りをしていたのだ。母は、「大変。のりちゃんや親戚の人たちに、なんと言ってお詫びしたらいいんだか。」と、ぼそぼそ言った。わたしもがっかりした。フィルムは入っていたけれど、母の冗談が本当になってしまったのだ。

写真を写したのは父だけだったので、のりちゃんの記念写真は、とうとうだれの手にも渡らないでしまった。だから、今のところ、わたしや妹が、「お父さあん。」と、節を付けて言うと、「あ、ご免、ご免。」と言いながら逃げ出してしまう父である。しかし、だれよりも残念に思っているのは、きっと父にちがいない。